『キリストが復活された証拠』　'23/04/09

聖書個所：Ⅰコリント 15 章 1-5 節（新約 p.339-）、他

皆さん、改めまして、おはようございます！そして、今日は、イースターおめでとうございます。皆さんも、よくご存知のように、今日は、1年に1度、イエス・キリストの復活を記念するイースター、つまり、「復活祭」であります。今から約 2000 年前のちょうど今頃の時期に、イエス様は、私たちに「救いの道」を用意するため、あの忌まわしい十字架にかかって…、そうして、その死から、約束通り、3日目によみがえってくださいました。

今日は、イエス様の復活を記念して…、もう1度、イエス様の復活というものが、果たして、本当なのかどうか？ということを、聖書のみことばから、皆さんと一緒に検証していきたいと思います。そうすることによって、今日、このメッセージを聴いてくださった皆さんが、イエス様の復活という教えに関して、より一層の確信を持つことができ…、そうして、その神様の前に、感謝しつつ、本当に価値ある人生を送っていってくださることを願うものであります。

命題：本当に、イエス・キリストは、十字架の死から復活されたのか？

まずは、今日のテーマとも言うべき、聖書のみことばをご一緒に見ていきたいと思いますので、どうぞ、Ⅰコリント 15:1-5 をご覧くださいますでしょうか？初めに、こちらで読ませていただきます。

1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。
2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。
3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、
4 また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、
5 また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです。

今読んだみことばで、使徒パウロは、「福音」のメッセージとして、イエス・キリストの十字架の死と復活とを挙げて…、「それらが最も大切なことである！」と教えてくれています。（もちろん、何故、イエス様が十字架にかからなければいけなかったのか？という理由も、それと同様に大切なことなのですが…）そうして、この福音の言葉を、よーく考えて、それをしっかりと保っていれば、あなたは救われる！ということを教えてくれています。

実は、ここⅠコリント 15:2 のみことばには、英語で言うところの「if」（もしも、～ならば）という条件節（εἰ）が2つ使われてあります。…と言うことは、ここ 2 節のみことばは、2つの条件を挙げて、もしも、私たちが、その2つの条件をクリアしているのなら、「あなたは救われているでしょう」ということを教えてくれているのです。それら2つの条件とは、①『よく考えもしないで信じたのでないなら…』という部分と、②『この福音のことばをしっかりと保っていれば…』という部分です。

つまり、ここのみことばを、意味を変えず…、少し言い換えますと、「もしも、私たちが、この教えをしっかり理解できていないと…、あるいは、もしも、この教えを保っていないと、あなたは救われませんよ！」ということでもあるのです。…そこで、今日は、幾つかのみことばから、もう1度、イエス様の復活ということに焦点を当てて、皆さんとご一緒に、聖書のみことばを検証していきたいと思います。

Ⅰ・空（から）の墓が意味すること！（ヨハネ 20:1-10）

そこで、まず、最初に見ていきたいことは、イエス様の遺体を葬ったはずの墓が、“空（から）”であった！ということを考えていきたいと思います。そのために検証したい聖書のみことばは、ヨハネ 20 章になります。どうぞ、もしできましたら、今度は、ヨハネ 20:1-10 をお開きください。そこには、こう記されてあります。

1 さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。
2 それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子とのところに来て、言った。「だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません。」
3 そこでペテロともうひとりの弟子は外に出て来て、墓のほうへ行った。
4 ふたりはいっしょに走ったが、もうひとりの弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。
5 そして、からだをかがめてのぞき込み、亜麻布が置いてあるのを見たが、中に入らなかった。
6 シモン・ペテロも彼に続いて来て、墓に入り、亜麻布が置いてあって、
7 イエスの頭に巻かれていた布切れは、亜麻布といっしょにはなく、離れた所に巻かれたままになっているのを見た。
8 そのとき、先に墓に着いたもうひとりの弟子も入って来た。そして、見て、信じた。
9 彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかったのである。
10 それで、弟子たちはまた自分のところに帰って行った。

イエス・キリストが十字架にかけられて、お亡くなりになったということを疑う者たちは、ほとんど居ません。しかし、問題となるのは、果たして、その後、イエス様が復活されたのか？本当に生き返ったのか？という問題であります。正直、私が、これまでに伝道してきた方々の中には、「そんなものは、イエス・キリストの弟子たちが作り上げた妄想（＝嘘）にしか過ぎない！」という人たちが居りました。正直、私自身も、教会に来る前は、正直、そんなことを真剣に考えたことも無かったですが…、何となく、イエス様が復活されたという話は、単なる、キリスト教の伝説か言い伝えの類であって…、事実のはずがない！と思っていたように思います…。

しかし、聖書のみことばは、そうは教えません！例えば、今読んだみことばがそうです。イエス様が十字架にかけられて、3日目となる日曜日の朝、イエス様が葬られたはずの墓が空っぽになっていることを、最初に見付けたのは弟子たちではなく…、女たちでありました。そうですよね？…イエス様が特別に選ばれた、あの 12 弟子（ユダを除く）たちは、イエス様が生き返られるとは夢にも思っていなかったのです。しかも、彼ら弟子たちは皆、イエス様から、そういったことを予め、聞いていたにも関わらず、です…。

皆さんも、よくご存知でしょう。イエス様の弟子たちは、リーダー格であったシモン・ペテロを始め、全員がイエス様のことを放っぽり出して、逃げ出してしまった者たちでありました。ゲツセマネの後、イエス様が裁判にかけられようとしていた時、弟子たちは誰一人、イエス様のことを信じて…、イエス様のことを守るため、ローマ兵に逆らおうとはしませんでした。そうでしたでしょ？元々、弟子たちは皆、イエス様の復活など、はっきりとは信じていなかったのです。だから、この時も、弟子たちは、1ヵ所に集まって、怯えていたわけです。どうぞ、皆さん、今読んだみことばのすぐ後、19 節をご覧ください。そこには、『その日、すなわち週の初めの日の夕方のことであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」』ということが記されてあります。

何度も言いますが、弟子たちは当初、イエス様が復活されるなどと、信じてはおりませんでした。だから、彼らは、ユダヤ人たちを恐れて…、1つ所に集まっていたのです。…彼らが信じたのは、実際に、イエス様

が復活されたという現実を見たからです。どうぞ、今先程読んだ、ヨハネ 20:7 をご覧ください。そこで、シモン・ペテロと恐らくヨハネとは、イエス様の遺体に巻かれていたはずの包帯が、『亜麻布といっしょにはなく、離れた所に巻かれたままになっている…』のを見たのです。…皆さん、「包帯が巻かれたまま」ということは、イエス様のからだが、まるで、そこから消滅？蒸発でもしなければ、「包帯が巻かれたままに残る」というような状況にはならないでしょう？

先程読んだ 8 節には、弟子（3人称単数）が『見て、信じた』と記されてありますが、彼が何を信じたか明確ではありません。彼（恐らく、ヨハネ）は、この時、イエス様の復活を信じたのでしょうか？それとも、イエス様の遺体が無くなっているということを信じたのでしょうか？…いずれにしても、ここ 9 節のみことばが教えているように、弟子たちは、まだ、この時点では、イエス様の復活を信じることができていなかったのです。…と言いつつ、その後も…、復活されたイエス様のことを直接見ることができなかったトマスは、イエス様が復活されたことをなかなか信じることができませんでした。そんなトマスも、ヨハネ 20:26-29 にあるように、この1週間後、イエス様がもう1度、現われてくださって…、そこで、ようやくトマスも、イエス様の復活を信じることができたのです。そんな感じだったでしょ！皆さん！

このように、イエス様の弟子たちは当初…、誰も、イエス様が本当に復活されるとは思っておりませんでした…。つまり、私が言いたいのは、イエス様の弟子たちは皆、イエス様が生き返ってくれることを期待して、何か幻を見たとか…、あるいは、大嘘をついたとか…、そんな状況にあったのではない！ということなのです。むしろ、弟子たちは、現代で言うところの、ノンクリスチャンたちと同様、イエス様の復活を疑っていたような…、そんな者たちであったのです。そんな彼らが、復活されたイエス様に出会ってから、大きく変えられたのです！だから、12 弟子たちは皆、この後、声を大にして、イエス様の復活と福音のメッセージを大胆に語っていくわけなのです！「確かに、イエス様は復活された！自分たちを含めて、人間は皆、死んで終わりではない！」って…。

しかし、そのような弟子たちの語ったメッセージは、それを信じようとしない者たちにとっては、不都合な出来事でありました…。特に、イエス様のことを十字架に追いやった律法学者やパリサイ人たち…、そしてまた、ローマ（帝国）からしてみたら…。そうですよね？しかし、彼ら、イエス様に反目していた者たちは、誰一人、イエス様が復活していない！ということを証明できなかったのです。

それは、つまり、どういうことかと申しますと…、イエス様の死後、そのイエス様が復活されたということを、弟子たちは宣べ伝えていったわけですから、それに対して反論したかったら、律法学者たちやローマ兵たちは、イエス様の遺体を持って来て…、それを見せたら…、イエス様の復活が偽りであるということを簡単に証明できたのです。…そうでしょ！…だって、この当時は、イエス様の十字架から、まだ何日かしか経っていなかったのですから…（当時は、土葬が一般的であったし）。

でも、イエス様に反目していた律法学者やパリサイ人たちも…、あるいは、ローマの軍隊も…、誰も、イエス様の遺体を出してきて…、イエス様の復活を否定できる者はおりませんでした。…と言うのも、イエス様の遺体が無かったからです！…じゃあ、誰が、イエス様の遺体を持ち出したのでしょう？…弟子たちでしょうか？でも、もし、弟子たちが、イエス様の遺体を持ち出したのだとしたら…、弟子たちは、イエス様の復活がなかったことを知っているわけで…、そんな弟子たちが、果たして、何人も（12 使徒全員と言って良い）殉教していくでしょうか？「人は、嘘のために死ぬことはできない！」と、私は考えます。果たして、イエス様の弟子たちは、嘘をついて…、その嘘をついたまま、一瞬の内に変えられて、そして、その嘘のために殉教していったのでしょうか？イエス様のことを信じておられない皆さんは、そのことについて、どうお考えになっておられるのでしょう？

今、イエス様が葬られたとされるエルサレム、「ゴードンのカルバリ」と言われる場所に行きますと、そこには、ある看板があります。そこには、「”HE IS NOT HERE- FOR HE IS RISEN（リズン）”（彼はここには居られません。よみがえられたからです。）」という意味です。確かに、イエス・キリストは、あの十字架で死なれました…。しかし、イエス様は死んで、そのままではありませんでした、よみがえられたのです！今は、空っぽになった墓が、そのことを証明してくれています…。

Ⅱ・日曜 礼拝が広まった！（Ⅰコリント 16:2）

次に、私たちが見ていきたい事柄は、“日曜日”の礼拝に関することです。実は、聖書のみことばのどこを探してみても、「週の初めの日（＝日曜日）に礼拝を持ちなさい！」というような命令を見付けることができません。…にも関わらず、聖書のみことばは、イエス様が復活されたという出来事を境に、日曜日の礼拝が始まった！広まっていった！ということを教えてくれています。それが、2000 年も経って…、今に繋がって、今では、ほとんどの教会が、日曜日に礼拝を捧げています。そのことを教えるというよりも、象徴的なみことばとして、Ⅰコリント 16:2 を選ばせていただきましたので、どうぞ、できましたら、Ⅰコリント 16:2 をご覧ください。

2 私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおのおの、いつも週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。

今読んだ、このみことばからは、当時の（ガラテヤ諸教会やコリントの）教会が、『週の初めの日』、すなわち、日曜日に集まって、礼拝を捧げていたことを窺い知ることができます。いえ、ここのみことばだけでなく…、使徒の働き全体を見れば、イエス様の復活後、比較的すぐに、クリスチャンたちは日曜日に集まって、パンを裂くなどして、イエス様の復活を覚えていたことが分かります。でも、一体どうして、当時のクリスチャンたちは土曜日ではなく…、日曜日に集まるようになっていったのでしょう？

皆さんも、ご存知の通り、この当時は、「安息日の礼拝」として、今で言うところの土曜日に礼拝を捧げていたわけでしょ！…と言いますのは、それこそが、旧約聖書の教えであり…、真唯一の神様が、当時のユダヤ人たちに命じられた教え！戒めであったからです。例えば、あの有名な出エジプト記 20:8-11 には、こう記されてあります。『8 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。 9 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。 10 しかし七日目は、あなたの神、【主】の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。――あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も―― 11 それは【主】が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、【主】は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。』

⇒今読んだみことばにありましたように、あのモーセの時代から、ユダヤ人たちは皆、「7日目である土曜日」を特別なものとして聖別して、その土曜日に礼拝を捧げておりました。…いえ、今でも、イスラエルに行くと、多くのユダヤ人たちが安息日（金曜の日没から土曜の日没まで）の規定を厳格に守っています。彼らは、未だに、安息日には、ありとあらゆる火を起こそうとはしないで…、エレベータのボタンも押さず…、冷蔵庫を開けても、安息日には明かりが付かない仕様のものを使い…、安息日用にある程度決められた食事を摂っています。彼らは、実に、3000 年以上に渡って、忠実に、神様からのみことばを守っているのです。ユダヤ人たちの厳格さは、歴史的に見ても…、また、世界的に見ても、明らかです。

しかし！そんなユダヤ人たちが、イエス様の復活を機に、土曜日での礼拝を止めて、日曜日に礼拝を捧げるようになっていったのです。間違いなく、初代教会のメンバーには、かなりの比率で、ユダヤ人たちが存在しておりました。…にも、関わらず、彼らは、7日目の土曜日ではなく…、イエス様が復活された週の初めである日曜日に礼拝を捧げるようになっていったのです！一体、どうしてでしょう？イエス様の復活が

事実でなくて、どうして、そんなことが起こり得るでしょう？正直言って、そのことに関しては、誰も、その理由を、イエス様の復活以外から説明することができていない、というのが実情ではないでしょうか？

今現在…、イエス・キリストの復活から約 2000 年経った今では、日曜礼拝の習慣が、世界各地に広まっています。今や、イエス・キリストの復活を記念する日曜礼拝が、世界中で行なわれています。果たして、イエス様の復活は、全く根拠の無いものなのでしょうか？…もしも、そうなら、一体どうして、あんなにも厳格に、安息日の礼拝を守っていたユダヤ人たちの多くが、日曜日の礼拝を守るようになったのでしょう？

実は、今でも、イエス様が復活された日曜日ではなく、旧約の教え通り、土曜日に礼拝を捧げているグループがあります。…「セブンスデー・アドベンチスト教会」という名前を皆さんも、お聞きになったことがあるでしょう。彼らは、聖書のみことばを厳格に守り、日曜礼拝は聖書的ではない！ということで、土曜日に礼拝を捧げておられます。…皆さんは、それを、どのように受け止めておられます？

誤解を恐れずに言いますと、正直、私はある意味において、彼らのことを尊敬しております。彼らセブンスデーの皆さんは、今も、聖書のみことばを重んじて、厳格に守り行なおうとしておられるからです…。しかし、彼らと私たちとでは、大きく聖書の理解が違う部分があります。…それは、旧約聖書に数多く記されてある「戒め」に関する理解です。旧約聖書に記されてある数多くの戒めを、私たちは「律法」として受け止めておりますが、現代に生きる私たちクリスチャンは今、その律法の下にはおりません！

だから、私たちは、例えば、十戒に記されてある数々の戒めを、神様からのお言葉であると理解して、それらを重んじはしますけれども、それらを厳格に守ろうとはしません。…と言いますのは、私たち…、「教会の時代」に生きるクリスチャンは、旧約聖書だけが教えるような律法の下には居ないからです。

じゃあ、皆さん、律法とは何なのでしょう？一体、何のために、神様は律法なんていうものを御与えになられたのでしょう？…どうぞ、できましたら、ガラテヤ書 3 章のみことばをご覧くださいます？そこのみことばは、このように教えてくれています。ガラテヤ 3:19-25、『19 では、律法とは何でしょうか。それは約束をお受けになった、この子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。 20 仲介者は一方だけに属するものではありません。しかし約束を賜る神は唯一者（ゆいいつしゃ）です。 21 とすると、律法は神の約束に反するのでしょうか。絶対にそんなことはありません。もしも、与えられた律法がいのちを与えることのできるものであったなら、義は確かに律法によるものだったでしょう。 22 しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。 23 信仰が現れる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰が得られるためでした。 24 こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。 25 しかし、信仰が現れた以上、私たちはもはや養育係の下にはいません。』

⇒まず、今読んだ 19 節で、『この子孫が来られる時まで…』とありますが、ここで『子孫』と訳されてあるギリシヤ語の言葉（σπέρμα）は、単数形です。何だか、「子孫」と訳されてしまうと、「子孫たち…」というようなイメージを持ってしまいますが、ここではそうではありません。これは、すぐ後の 24 節を見ても分かる通り、イエス・キリストのことを指しています。…つまり、律法とは、永続的なものではなく、（有効）期限があるのです。その期限とは、イエス様が来てくださるまで、です。この律法は、私たちが、神のみこころに沿うことができない罪人であるということを教えてくれます。…このように、律法の教えが無いと、私たちは、何が神様のみこころでないか、何が罪なのかを明確に判断することが難しかったはずです（ローマ 7:7）。

だから、ここのみことばは、律法のことを、「私たちをキリストへ導くための養育係だ」と教えるのです。…しかし、イエス様を信じる信仰によって救われた、私たちクリスチャンは、もはや、律法の下には居ません。だから、私たちは今、割礼を受ける必要は無いし、いけにえを捧げることもしないのです。

じゃあ、一体どうして、私たちは日曜日に、こうやって教会に集まって、礼拝を捧げているのでしょう？…それは、私たちがイエス様の十字架を感謝し、そのイエス様が、あの十字架の死から約束通り、3日目によみがえってくださったことを信じているからです！…これは、神様の命令ではありません！私たちクリスチャンが自発的に…、つまり、誰からも強制されることなく、好きで集まっているはずです。

もしも…、皆さんが、イエス様の十字架と復活とを信じ、それによって救われ、そのことを心から感謝しておられるなら、皆さんは、自分のような者を救ってくださった神様の愛や恵みに感謝するだけでなく、もっと、神様のことを知りたい！神様に喜ばれるよう生きていきたい！同じ主によって救われた兄弟姉妹たちと一緒に成長していきたい！と願われるはずです！…そうした思いが、継続して、日曜日に教会へ集まるという行動へと繋がっているのではないでしょうか？

Ⅲ・このことで、人生を変えられた者たちが数多く存在する！

そうして、最後に見ていきたいことは、イエス様の十字架と復活とが、実に、多くの人たちの“人生を変えてきた！”という現実であります。そういったことを、私たちは、聖書のみことばを通しても…、また、現代にあっても、多数確認することができます。

まず、聖書が教えてくれている人物ですが、それに関しては、私たち、改めて言うまでもなく、もう既に皆さんはご存知だと思います。まずは、イエス様の 12 弟子たちがそうですし…、初代教会のクリスチャンたちも…、彼らは皆、イエス様の復活を通して、大きく人生を変えられ…、そのために生き…、また、そのために死んでいきました。そうですよね？

今日、ある人物を紹介したいのは、「ジョシュ・マクドウェル（Josh McDowell）」というアメリカ人です…。彼は、1939 年生まれで…、日本で言うと、昭和 14 年の生まれになります。彼の父親は、アルコールや虐待などの問題を抱えていたそうです。そんな環境で育った、ジョシュ・マクドウェルでしたが、彼は大学までノンクリスチャンと言うか、所謂、不可知論[1]者であったそうです。しかし、彼は、ある時に、「イエス・キリストの復活など有り得ない！」ということを、科学的＆論理的に証明しようとして、自分で独自に、聖書やキリスト教に関する研究を始めたのだそうです。しかし、彼が調べれば調べるほど、聖書の記事が、彼には信憑性のあるもののように思えてきました。そうして、彼は、クリスチャンになったのです。

現在までに、このジョシュ・マクドウェルは、共同執筆も合わせると、145 冊ほどの信仰書を書いてきたのだそうです。彼の執筆した 145 冊の著作は、100 を超える言語に翻訳されて、世界中で読まれています。彼の代表作？とも言い得る、「神か大工か」（原題：More Than A Carpenter）という作品は、総発行部数が 2700 万冊にもなるそうです。彼の著作の幾らかは、「キリスト教弁証論（聖書の真理、つまり、神の存在や創造論、イエス様の復活などを証明しようとするような学問のこと）」とも言われるもので、彼自身が研究してきた成果であるとも言えます。彼は、所謂、現代における、聖書の正しさを立証するような学問の第一人者と言って良いと思います。…でも、このジョシュ・マクドウェルに限らず、そういった人たちって、たくさん居られますよね？

[1] 宗教的不可知論のひとつのタイプとしては「神は「いる」とも、「いない」とも言えないのだ」とする中立的不可知論がある。他に、政治的な意図から無神論者であると言明するのがはばかられる場合に用いられる表明が入れられることもあるが、これは政治的な運動であるマルクス・レーニン主義者や科学原理主義者などの無神論者からは ″相対主義的だ″などと批判されることがあった。（ウィキペディアより）

こんな言い方をするのも、あれですが…、かく言う私自身だって、初めて、教会に足を踏み入れた時には、無神論者でした。「天地万物を創造された神様なんて、居るわけがない！もし、万が一、神様が居たとしても、私たちには何もしてくれないし…、自分には関係ない！」なんて考えていました…。しかし、そんな私も、教会に来て…、そうして、聖書の教えを聴いて…、カルチャーショックを受けました。まさか、この現代で、進化論を信じず…、神様によってすべてのものが創造されたとか、あるいは、イエス・キリストの復活を信じている人たちがいるとか、夢にも思っていませんでした。

でも、そこから、私なりの聖書研究が始まりました…。当時は、インターネットも無かったので、色々と大変でしたが、私なりに、聖書のことを調べて…、少し批判的に、いろんな書物を開いたり…、私自身、疑いの気持ちを持ちながら、教会に来て、聖書のメッセージを聴いたりしていました。しかし、段々と聴いているうちに、自分の考えの方が浅はかで…、むしろ、自分自身の方が偏見で…、公平ではない偏った見方をしているのではないか、と思うようになってきました。…ま、詳しいことは、この教会が発行している、「Good News 第１号」をご覧になってくだされば良いと思いますが…、でも、私が言いたいことは、私だって、私なりにと言うか…、私自身ができる範囲で、真理というものを検証した結果、イエス様の復活は事実である！という結論に行き着いたということです。

でも、それって、特別なことなのでしょうか？正直言って、聖書の内容や教会での教えに疑いを持って、それを自分自身で検証してみた！っていうのは、ジョシュ・マクドウェルや私だけに限定されることではなくて…、ほとんど、すべてのクリスチャンたちが…、いえ！すべてのクリスチャンが通っているはずの道ではないでしょうか！そうですよね？クリスチャンの皆さん？ここにおられるクリスチャンの皆さんも、クリスチャンホームの出身であろうとなかろうと…、ある時に、聖書の内容や、あるいはまた、教会で教えられている内容について、自分なりに検証して…、そうして、納得して…、いえ、確信を持って…、なおかつ、自発的に…、ここに、こうやって集まってくださっているはずであります！そうですよね？

それこそが、今日、メッセージの冒頭で紹介した、Ｉコリント 15 章のみことばです。…間違いなく、皆さんだって、この聖書の教え…、真の造り主なる神様とか、私たち人間の罪とか、あるいは、イエス様の十字架と復活について、皆さんなりに、精一杯、考えて検証されたはずです！…もしも、そういったことを深く考えることなく、今の信仰を持たれたのだとしたら、私たちは、もう1度、自分自身の信仰を見直すべきではないでしょうか？

＜励ましの言葉＞

2000 年前に起こった、イエス・キリストの復活は、その当時の者たちのことを変えただけではありません。イエス様の復活は、2000 年近く経った現代でも、多くの人たちの人生を変えて…、大きな証しをなしてくださっています。果たして、それは、私たちの勝手な思い込みか…、あるいは、何かによって騙されているだけなのでしょうか？もしも、真の神様が、この聖書を与えてくださったのではないなら…、この聖書は、2000 年以上も前の人間たちの知恵によって書き記されたことになります。しかし、2000 年以上も前の人間たちによって書かれただけの「単なる書物」が、天地創造から始まって、あのユダヤ人たちの壮絶な歴史を描きつつ…、イエス・キリストという救い主の誕生から十字架での死、そうして、復活なんていう、ドラマチックで壮大なストーリーを完成できるものでしょうか？…そして、2000 年も前に書かれた「単なる書物」が、2000 年も経った今もなお、私たちに様々なことを教え…、私たちのことを大きく変えるなんていうことが、本当に可能なのでしょうか？

私は今、こんな風に考えています…。もし、誰かが、本当に聞く耳をもって…、この聖書のみことばに耳を傾けてくださったら（それは、たった1度や2度、教会に来てメッセージを聞くというのではなく、継続して、最低でも１－２年教会に通いつつ、真剣にメッセージを聴いてくださったとしたら）、もっと多くの人たちが…、かなりの確率で、イエス様の復活を信じ…、私たちと同じ信仰を持ってくださるのではないかと…。しかし、実際は、ほんの数回、教会に来てみて、「やっぱり、自分には受け入れられない…。大して、興味深い話をしてくれていない…。」と感じて、教会に来るのを止めてしまわれるパターンがかなり多いようです。でも、イエス様の復活が本当にあった、事実なのかどうかということは、私たちの人生を大きく変え…、その人の永遠さえも大きく変えてしまうほどの出来事であります。

どうぞ、短絡的に、答えを出してしまうのではなく…、続けて、教会に通って、そして、何より、聖書の教えをしっかりと吟味してくださって、本当に、これが信じるに値するものなのかどうか？ということを、あなた自身で、判断していただきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。

＜参照資料＞

（写真①：ゴードンのカルバリ）

（写真②：園の墓の外部）

（写真③：園の墓の内部）

イエス様が十字架上で発せられた言葉は、7つ[2]ある。

[2]備考（十字架上の七言） ①『父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。』（ルカ 23:34）②『まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。』（ルカ 23:43）③『女の方。そこに、あなたの息子がいます。』（ヨハネ 19:26）④『エリ、エリ、レマ、サバクタニ。』（マタイ 27:46）⑤『わたしは渇く。』（ヨハネ 19:28）⑥『完了した。』（ヨハネ 19:30）⑦『父よ。わが霊を御手にゆだねます。』（ルカ 23:46）